

慢性痛
急性痛

藤井洋泉先生の今月のカルテ

vol.106

ペインクリニックの現場から

梶木病院麻酔科・ペインクリニック科の香曾我部義則先生と藤井洋泉先生が、痛みの治療や緩和についての情報を届けてくれる「ペインクリニックの現場から」。前回の続きで、藤井洋泉先生が腰椎（ようつい）椎間板ヘルニアの治療と予後について話をしてくれま

す。まずは、保存的治療を行います。

保存的治療には、安静、内服治療、ブロック治療、理学療法などがあります。

痛みの程度が強くて、足の筋力低下や麻痺（まひ）が強く、排尿、排便に異常がなければ、すぐに手術にはなりません。

椎間板ヘルニアの痛みは、椎間板が神経に当たっているための痛みが主体ではなく、ヘルニア部位での局所の炎症による痛みが主体です。そのため、安静と局所の炎症を抑える非ステロイド性抗炎症薬（NSAIDs）がよく使われます。

近年、新しい薬が発売されており、NSAIDsが効かない痛みにも効果が期待できます。足の望めないで、何度か行

う必要があります。神経ブロックは長期間の効果が期待できるので、保存的治療の初期に受けた方がよいでしょう。硬膜外ブロックの間隔や回数、神経根ブロックを行う時期は、病院により違いがあります。また、脳梗塞（こうそく）後、心臓手術後などで、血を止まりにくくする薬（抗凝固薬）を飲んでいると、ブロック自体ができません。

これらの保存的治療で改善せず、筋力の低下や麻痺症状が出現したら、手術を検討する必要があります。ヘルニアの約10〜30%の人が手術を行っています。手術は、内視鏡下椎間板ヘルニア摘出術が主流となっております。区西花尻）の藤井先生で

お答えは、梶木病院（北

3555）

3555）



■プロフィール ふじい・ひろみ 平成2年岡山大学医学部卒業後、同大学医学部麻酔科蘇生科入局、岡山労災病院麻酔科、岡山大学医学部附属病院麻酔科蘇生科などを経て平成19年から現職。日本麻酔学会指導医。日本ペインクリニック学会認定医。現在、国際疼痛学会、日本麻酔学会、日本ペインクリニック学会、日本慢性疼痛学会などに所属

腰椎椎間板ヘルニアの治療は保存的治療からスタート
症状が改善しない、痛み増強、筋力低下が現れたら手術の検討を

です。新しい術式としてレーザーで椎間板を蒸散させる方法があります。周囲の組織への副作用や合併症が多く、健康保険の適応外ですので、現時点では内視鏡下ヘルニア摘出術より優れた方法ではありません。レーザー椎間板蒸散術を考えている方は、脊椎外科専門医によく相談してみてください。

腰椎椎間板ヘルニアの治療は、保存的治療から始めますが、症状が改善しない、あるいは、治療途中の痛み増強、筋力低下が出現したら、手術を検討しましょう。